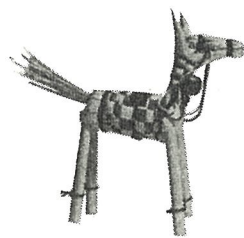


入試と体育実技テスト

加藤 明 美



1

先頃、徳島県教育委員会が昭和四十一年度の公立高校入学試験の一部として実施した、中学生の体力実技テストは、社会的に多くの問題を提起したようである。新聞報道によると、参加した約一万五千人中、目まい、頭痛がいれん、けがなどで六十人余りが医師の手当を受け、その後一人が死に、一人が全身まひで重体になっているという。これまではほとんどどの府県において保健体育はペーパーテストが行なわれていたようであるが、これが今年から徳島県においては実技テストに変えられたもので、その他の府県でも高校入試に

実技テストを加えようという動きが広がっているように聞いている。このようなことについて保健体育を担当する者として少し私見を述べてみたいと思う。

体育とは何かという定義を持ち出すまでもなく、体育(Physical Education)は身体教育すなわち身体を通しての教育(Education through the physical)である。最近の中高生の体格・体力の特徴について昭和十年前後と比較して、体格の面においては著しい伸びをみせているのにかかわらず、走跳投といった基本的な運動能力例えば走り幅とびでは平均二十センチ、五十米走では〇・二秒おとるというようにむしろ低下しているという報告

が文部省から出されている。普通われわれの常識からいえば身体が大きくなれば力も強くなるというふうにとらえられるが、現在のところでは統計的にみれば逆の現象が生じている。この理由については種々の原因をあげて説明することが出来るだろうが、その責任の一つは現在の体育、特に学校体育にあると考えられる。

人間の一生のうち身体的な面で発達が最も著しい時期は、生後一年間と、中学時代に現われる思春期であるといえよう。そのもっとも形態的に機能的に変化する時期に適当な刺激をあたえることにより、その発達を助長してやる必要がある。しかるに現在のところ社会的観点からみても身体活動をする「場」というものがきわめて少い上に、学校教育の中においても受験のため生徒達の身体活動の時間の多くが失われている現状にある。加えて先にも述べたように全国的に体育はペーパーテストが入試という形で行なわれているため、体育の授業が身体活動を通して、という本来の姿を失い、ややもすると知的理解という方向に重点が置かれている嫌いがある。これは体育のみならず音楽科、美術科、

家庭科等実技をともなう学科に共通した問題であるが、体育においては特に理論より実際に行なう身体活動がなければ本来の目的が得られない。

2

昨年度の京都府の公立高校入試の保健体育のテストをみてみると八問題からなり、別表のように分類することが出来る。以前はかな

1 保 健	死因別死亡率について
2 運 動 生 理	疲労に関して
3 測 定 法	運動能力テストの測定法
4 陸 上 競 技	ハードル
5 徒 手 体 操	運動個所と強度
6 バレーボール	トスとキルの技術
7 バスケット	ランニングショット
8 男子向の問題	倒立と前転の技術
女子向の問題	フォークダンス

りの部分がスポーツの規則についての問題であったが、昨年度では表からも分るようになる。の大部分は運動技能についてかなり高度なものが必要となるような問題になってきている。これらの技術は一般中学生が現実身に付けたもので、そこから解答を要求している

とすれば、学校体育のあり方としても肯定できる。しかしながら私の経験から一般生徒をみてみると、限られた授業時間の中ではどうして無理である。例えば本校生徒の場合から考えて、バレーボールのトスやキルがどれだけの者に出るだろうか、またハードルをこなせるだろうか、こういう疑問が数多く出てくる。確かにこれはわれわれ体育実技を担当する者の指導力如何にかかっている問題である。そしてこれらは文部省の指導要領の中にも示されているものでもある。しかしこれらの実技を限られた配当時間の中で履習させることは不可能に近い。これは必ずしも本校だけに出来ないことではないようである。全国から集まっている同志社大学の一般女子学生にバレーボールをさせても、トスやキルは勿論、パスでさえ充分に出来ない者も多い現状にある。そこで実技の中で学ぶのではなく知的理解が中心になっていく。幸い本校においては高校進学という問題がないため、自由に実技中心のカリキュラムを置くことが出来る。しかし一般公立中学の場合は高校入試のために実技時間を少なくしても、理論をやるという状態が起ることは当然考えられること

である。こうした状態を打破する意味において、高校入試にペーパーテストをやめ、実技試験を取り入れたことは画期的なもので、真の体育の姿を取り戻す上に大きな意味を持つものである。ペーパーテストをやめただけでも理論に費やされる時間は減少し、実技中心にカリキュラムの編成が行なわれるだろうと推定される。加えて実技テストになれば当然生徒たちの運動技能や耐久力、敏捷性等に重点を置いた授業活動が行なわれるようになる。

3

それでは現実には体育は実技試験に切りかえられたことによりどうなったかといえば、徳島県の例にみられるように世論の大きな批判をあびるような結果になってしまった。これは一度に変革をもたらしたための混乱とみる事が出来る。特にこの実技テストに採用された体力テストは生徒達にとってかなり大きな負担となるものであり、中でも問題となつた持久走のようなものは受験という状況下で行なうことについては慎重な配慮がなされなければならない。

次にここで実技試験の問題点について、二記しておいてみたい。第一にペーパーテストを廃止してすぐに実技テストに切り換えたことは、生徒自身の持つ体力と実際の体力テストの間に大きな差が生じていることである。先にもふれたように学力の偏重、身体活動の軽視、また特に都会地等においては身体活動を行なう場の不足、テレビ等の普及により多くのスポーツは自分で行なうものから見るものへと変り、交通機関の発達は歩くという人間の最も基本的な動作さえも制約するようになってきている。このようなことから自然生徒の体力は低下の一途をたどっていることは当然である。こうした中で生徒の体力が充分把握されずに一方的な要求のみをかかげてテストを行なったことに問題がある。実施にあたっては二、三年間の猶予期間を置き実態調査や方針を充分に検討することが必要であらう。

第二には入試の得点に加えることに對する疑問である。受験生の立場になれば一点でも多くとりたいたいとして無理をするようになる。本校においても数年前まで中学の入試に保健体育・家庭・美術・音楽の科目をペーパーテ

ストで行なっていたが種々の問題で廃止した。大きな理由は実技をとまなう学科をペーパーテストのみで判定することへの反省である。その時体育科の意見として、それでは実技テストを行なったらどうかという検討がなされたが、時間的余裕等の問題で到底出来ない状態であった。特に実技テストを行ない判定の資料にどのように用いるかということになると、得点へ換算することは技術的に困難なことである。そればかりか受験生に對して必要以上の負担をかけるようになる。体育の実技試験はあくまでも得点に換算して資料とするのではなく、入学後、生徒が学校教育を受けられるだけの体力、技術があるか否かの資格検査的なものにすべきである。またその資料により、入学後の生徒の体育指導の方針を決めるものとすべきだといえる。そこで実施に当ってはある程度の基準を明らかにし、受験生にあまり大きな負担のかからないように配慮すべきである。

4

入学試験のペーパーテストが実技テストに変えられる動きは、以上みてきたように学校

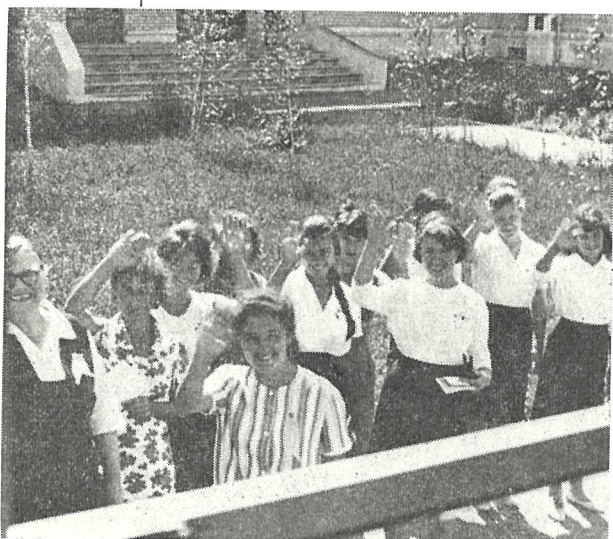
体育を正しい姿にもとし、生徒の体力向上の上にも大きな力となると考えられる。ただその実施方法に對して十分な配慮が払われないで、安易に体力テストをもって代用しようというようなことが今後も行なわれるならば、折角もり上つてきている機運も、世論の批判の後に後退をよぎなくされるであらう。われわれ体育指導者も充分この問題を反省し、根本的に一般生徒の体力向上に留意しなければならぬ。オリンピックの時に選手の強化ということで一部の選手の技能をのばすことのみにより力がそがれた。学校の中でもクラブ活動等で一部生徒の強化ということに力が入れられ過ぎる嫌いがある。もちろんこれも必要であるが、もっと大切なことは国民全体の体力、ひいては種々の運動技能を伸ばし、生活に密着した体育活動を幅広くするようにしなければならぬ。日本ではよく社会体育の貧困が言われるが、社会人となつても種々の体育活動が続けられる基礎を学校教育はつくるよう心がけたいものである。

(女子中高教諭・保健)

シベリアの町で

竹 内 一 重

私たちは総勢二百五十名、ソ日協会、全ソ労組評議会、ソ連婦人委員会、ソ連教育労組その他各種団体からの招請に応じて結団され



ハバロフスク第12中学校の生徒たち

ソ連邦ハバロフスク市で日ソ友好と平和のための会議を持つことになっていた。

一行が横浜港を出航したのは昨夏八月十六

日午後四時きっかりであった。ソ連差し廻しの特別専用客船ヤクーチャは一九一三年進水、進水間もなく第一次大戦においてルーマニヤ海岸で沈められ、海底に眠ること二十余年、一九三七年に引揚げられ就航したが、第二次大戦では自身でオデッサ港口の閉塞のため再度海底に没したという経歴の持主であった。ために船足は遅く、現在、横浜ナホトカ間の定期客船バイカルが五十三時間ほどで走るところをなんと七十時間余り掛ってナホトカ港へ入港するという状態であったが、好天に恵まれ海は穏やかであったし、船員は細かいところまで気を使ってくれ非常に親切であったので、船の中は快適であった。そしてこの団体が夫婦揃って参加しているのは私たち唯一組だけであったから、三等客室ではあるが六人も入れる室を特別に割り当ててくれたりしたので、なほのこと気が楽であった。

船内で出会うのは女性の船員の方が多かった。彼女たちの職場はレストラン、売店、救護室等だけでなく、船内掃除から昼夜三交替の各室当直に至るまでおよそ女性で出来ると思われるところはもちろんのこと、男性の分野にまでも入って働いていた。きりっとした

仕事スタイルでてきばきと楽しそうに働く姿は見ていて気持ちの良いものであった。考えて見るとこの船の船員の半数くらいは女性で占められているのではなからうか。日本船では考えられないこの事実は私にとって一つの驚きであった。

ナホトカ

ナホトカの町は何とはなしにうらがなしかつた。坂が多く単調で画一的なアパート群が広い道路に面して立ち並んでいるだけで、これといって見物する所もなく、小高い丘の上から暮色迫る港を眺めた時には、あの「異国の丘」の歌がふっと脳裏をかすめたほどであった。

ナホトカの駅前右手のところに公衆便所があった。妻が暫くして驚いた顔をして飛び出して来た。間仕切りだけで戸が一つもなく、通路から丸見えだというのである。彼女らはゆうゆうとお隣り同士話をしながら用を足しているのだそうである。人々は素朴さを一抔溢れさせているという感じであった。どことなく鈍重で田舎臭さを持ち、色取り取りの服装も質素な感じであった。夕暮の中をゆっ

くりと恋人らしき二人連が寄り添って散歩する姿が印象的であった。

午後八時、私たちは特別仕立急行列車でハバロフスクに向った。

ハバロフスク

ハバロフスクの町はすごく美しかった。アマール河中流域にあるこの町はロシアの探検家、旅行家であったE・P・ハバロフの名を記念して付けられたもので、一八五八年にハバロフ要塞として作られ、一八九三年にハバロフクスと改名された極東地域の重要な工業、運輸、教育、文化の中心地である。人口約四十万人、アマール河に沿うて町は広がっており、そこには各種機械工場、木材、罐詰、製粉等のコンビナートや鉄道、医科、教育、工科等の各単科大学を始め、林業、農業、畜産の各研究所、太平洋漁業、海洋科学研究所そして四つの劇場、テレビセンター、放送局等があり、またマガダン、カムチャツカ、サハリンへの航空路の起点でもある。

ちょうど真夏の盛り、日中の暑さは京都と比べると変りはなかったが、湿気の少いせいかなんら快適であった。それにも増して真青

な空、澄んだ空気、思わず胸一杯の深呼吸をしたほどであった。緑濃き大きなトボロの並木の続く幅広い完全舗装道路をゆきかう自動車の数も少く静かであったし、そここに作られた大きな花壇には、赤白黄紫の大輪のダリヤやグラジオラス、コスモス、スイトピーその他名のわからない花々がぎっしりと植込まれ、それらが今を盛りと咲き乱れて町に色どりを添えていた。

私たちはここに着いたその日の午後、この町の郊外にある日本人墓地を訪れた。夏草の生茂る荒れた小高い丘の上のこの墓地のまわりは、遥か彼方まで手の入っていない荒野であった。傾きかけた木柵の内は美しく手入れがされてはいたが、緑に映える白い墓石に刻まれた番号数字には心の痛みをおぼえた。花を捧げ、日本からはるばる持って来た線香を焚いて心から冥福をお祈りした。

対岸が遙かに霞んで見えるほどアマール河の川幅は広がった。少し黄色に濁りを帯びた水はとうとうと豊かに流れ、白い大きな遊覧船が赤旗をひらめかしながら上ったり下ったりしていた。中央文化公園内のアマール河畔は水着姿で芋の子を洗うような賑いであった

が大方の人は岸辺での甲羅干しであったし、女性はお若を問わずほとんどビキニスタイルであった。

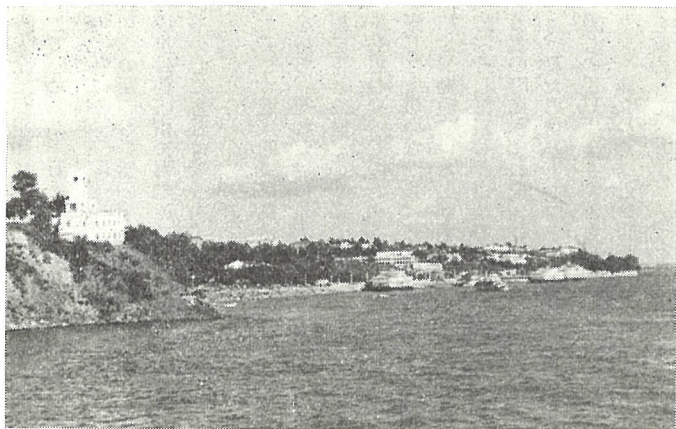
会議は大体午前中に済まされ、午後から夜半にかけては視察、見学、遊覧、レセプション等に当てられていた。

専門別視察で私が訪れたのは、町の中心部にあるハバロフスク第十二中学校、当市のモデルスクールで合唱、体育が有名な学校であった。一九五三年の設立というから比較的新しい学校である。生徒数一三五〇名、先生五十名、職員二十五名で構成されており、一年生から八年生までの一クラス定員が四十二名、九年生から十一年生までは一クラス三十名で授業を行っているという少々うらやましい話であった。学校では人々の間の友好を教育の目的として掲げているのだそうで、団体生活を重視していることが伺い見られた。もちろんレーニン主義はこの学校でも中心であり、常に学習出来るようにレーニンの資料を陳列した一室が特別にもつけられていて何時でも見ることが出来るようにしてあった。理科教室、理科備品等や教育方法等の面から見てこの学校ではとり立てていわゆる勉強面を

特に強調しているという風にも思えなかった。このような教育が一般に行われている一方、毎年ノボシビルスクでこの地方の理数科等の実力コンクールが催され、そこで優秀な成績を修めた人はその地に残って特別に勉強することが出来るという英才教育も行われているようであった。各個人の才能開発というところであろう。

私はこの授業参観がしたいと思ったが、ちようど八月終りまで夏期休暇中で見ることが出来ず大変残念であった。九月一日から新学期が始まるわけであるが、私もその頃には日本に帰らなければならず、次の機会にはぜひとも参観したいものであると思った。

休暇中の子供の大多数はこの夏休みを彼らの属しているピオニールキャンプで過しているのだそうである。ピオニールはボーイ・ガールスカウト等に当り、ここでも集団生活を通して教育が行われているわけである。これに対する力の入れ方もひとしおで、各地にピオニール宮殿を作り、子供たちの夢を育てつつ余暇を過すことの出来るように各種の設備が完備され、それぞれの専門の先生を配して指導に当たっていた。



アムール河畔の中央文化公園

このような集団生活の結果、国民の間では相互信頼の念が非常に発達しているようであり、例えばバスや市電は全てワンマンカーで、運転席と乗車席とは完全にガラスで仕切られ

運転手は運転以外一切行わず、乗客は誰も見ていない料金箱に乗車賃を放り込み、勝手に横に付いている領収書を取るということを当り前のこととして自然に行っていたし、もちろん街路等公共物を汚したりするような公衆道徳に反することも見られなかった。

また、一旦お互いの垣根を払って彼らと友人となると随分好人物的親切さを示してくれた。ハバロフスクに着いた最初の日、たまたまその日半日だけ狩り出されて私たちのバスに乗り込んだ二十五、六のガイド女史と私の妻とが仲良くなった。彼女はリリーさんと言いま市の工科大学の英語の教師で妻と同じく大学講師というところかどうかは知らないが気が合ったらしく、ハバロフスクに滞在した四日間というのは毎日自分の仕事を放ってまで朝早く出掛けて来ては夜遅くまで常に妻の横に付添い、気を配ってくれるという風であった。ハバロフスクからモスクワに向う時には飛行場まで見送りに来て抱き合い、必ず来年もまた来るようにと別れを惜んでくれるほどであった。

人々の生活は安定しているようであった。生活必需品は豊富に出廻っていて非常に安価

のようであった。外国製品はほとんど見られず、町を走っている自動車も全部国産車でタクシーはボルガ、モスクビッチは主に自家用として用いられていた。生活に余裕が出来て来て自家用車を買いたいと思っても、注文して二、三年しないと手に入らないという大学教授もいた。第一アパート賃が月収の五パーセントから十パーセントまでと言うからうらやましき限りであった。私たち夫妻を招待して昼食の御馳走してくれたCさんの家は、約十二畳くらいの居室一室とダイニングキッチンルーム、バストイレ付きで家賃月額二十ルーブル。彼は奥さんと十歳、十二歳の子供の四人家族で放送局勤務、月収三百ルーブル（一ルーブルは日本円で四百円）とのことであった。市民の平和の願う気持は非常に強かった。たまたま昨年は対独戦戦勝二十周年記念硬貨等が発行されたりしていたが、私たちに終始通訳として付添い世話をしてくれた人にтеленチェフさんというウラジオストーク極東大学の英語と日本語の講座を担当している先生がいた。「現在は小児科医の妻と十四歳、十歳になる子供とで楽しく生活しているが、今大戦では二人の兄を戦場で失い、自分も戦傷を

負った」とその流暢な日本語でしみじみと戦争の悲惨さを語り、平和の有難さを強調していたが、その言葉の中には心からの真実さが籠っていたし、またあのレニングラード九百日攻防戦で生き残った人々たちを始め、会う人々全てが平和について非常に強い関心を示していた。二十万人の親子兄弟を失ったこの国としては、その傷跡は各所にあり、その平和への関心も当然の事と思われた。そしてこの事は他人事でもなく共通の感情として私たちの心にも強く響くものであった。

美しく近代적ではあるがどこことなく泥臭さを持ち、それだけに雄大な大地にがっちりと根を下した感じのするこの町、無限の広がりをも思わせるこのシベリヤにおいて、自然の厳しさと戦いながら、自らの目的に向って団結し、働いている上げ潮の気に満ちた人々の町、そして親しく友情を交した新しき友のいるこの町にも別れを告げて、二十四日の朝早く、私たちはハバロフスクの空港から二百人乗りのTU114型旅客機に乗り、一路モスクワへ旅立った。近い将来に再び訪れることを確約して。

（商高教諭・理科）

ロシア建国説話

清水 睦 夫



1
来年、一九六七年は世界最初の社会主義国家『ソビエト連邦』が成立した一九一七年

からちょうど五十年目に当るというので、ソ連では大々的な革命五十周年記念祭が計画されているという。今次大戦後、米ソの関係が激化と緊張緩和をくり返すうちにあって社会主義の勢力がいちじるしく伸張し、世界の三分の一を占めるにいたったという現実を直視するとき、わずか半世紀たらずで今日の地位にまでの上ったソ連の成長ぶりに驚嘆せずにはおられないであろう。でもいったいどのような歴史の道を行んで今日にいたったのであろうか。残念ながら西欧の歴史につい

ての知見に比べてソ連およびその前身であるロシアの歴史についてわれわれの知識はすこぶる貧弱そのものであることが告白されねばならない。

ところでロシアの歴史は、ふつう、古代ロシア国家（キエフ・ルーシ）時代、蒙古人による羅刹^{ロシヤ}の時代、モスクワ大侯国時代、ロシア帝政時代、ソビエト時代という五時期に大別されているが、その国家始原の問題、すなわち、いつどのようにしてだれによってロシア国家が形成されたか、という課題はまったく紛糾した状態を示している。事実、この問題は十八世紀中ごろ以来、二百年にわたって論争しつづけられてきたが、今日なお甲論乙駁、しかも決定的な結論は望めるかどうか、

疑問がもたれたままになおも将来永く論議的となることが予想される。

国家の統一が進められ、国家意識・民族意識を高め、愛国心を奮起させようと意図するとき、歴史編纂が行なわれ、建国説話の整備が大きな仕事として強調されてきたことは、国の内外を問わず、むかしから歴史上に多く例を見るところである。古くはローマ建国に關するロムルス兄弟の伝説、また十九世紀では近代歴史学の金字塔を樹立した、民族統一国家建設時のドイツ史学によるゲルマン民族主義の強調、ナチス・ドイツがドイツ人による世界制覇の前提として非合理的な民族紀元への回帰を準備していたこと、あるいはまた近くわが国でも、天皇の神聖は絶対的權威を維持するために学問的批判を許さぬ神祕のベールをかぶせて天皇中心主義のいわゆる『皇国史観』という名のもとに非学問的・非科学的な歴史解釈が強調されてきたこと、そしてまたソ連にあっては、とくに国家主義が大々的に宣伝された一九三〇年以降の『ソビエト愛国主義昂提期^{こきやうき}』におけるソビエト歴史の意識的な歴史の歪曲などが想起されるのである。およそ一つの国の成立事情というものは

決して単調でなく、したがってその建国の歴史がきわめて複雑多様な姿をとっていることは間違いないだろう。今日のわが国の紀元節復活是非論―その歴史的根拠の真実性をめぐる論義とも考えあわされて、いまここにとりあげたこの『ロシア国家の起源』問題が古くからロシア古代・中世史の研究者たちの関心をそそり、政治的にも尖鋭化させられ各国学界において華々しい論争を展開してきたのも当然であつた。

2

ヨーロッパ史によれば、ほぼ九世紀頃から十一世紀末頃まで約二百年にわたつてウィキングまたはバイキングと呼ばれるノルマンの海賊がバルト海沿岸、地中海沿岸地域、イングランド、西は遠くアイスランド、グリーンランドから北アメリカ沿岸にまで侵略を行なっている。また一方、彼らノルマン人は九世紀後半（八六二年頃）、リュリツク（リュリツク王朝の開祖）にひきいられて東進し、ロシアの地（イリメン湖畔の町ノブガラット）に乗り込みスラブ人を征服して国を建てた。これがロシア国家の起源である、といわれて

いる。ロシア最古の『^{ペルグヤ・ド・ロシヤ}原初年代記』では、こうしたノルマン人を『ワリヤーク人』と呼びまた『ルーシ』とも呼んでいるが、『ロシア』という名称はこの『ルーシ』に由来する、という。これを『ノルマン説』といっている。

この説はまず最初、十八世紀前半期にロシア帝国学士院会員であつたドイツ人の歴史学者たち、ことにG・Z・バイエルやH・F・ミューラらによつて創唱されたが、ちょうどそのころが「ドイツ人のロシア支配時代」とさえいわれるアンナ女帝の寵臣ピロンの暴政時代（一七三〇年代）であつたことは決して偶然の時の一致ではなかつた。かれらはいずれもロシア年代記の記述を肯定し、ギリシア（ビザンティオン）アラビア、スカンジナビアその他の古文獻や言語的資料に基づいて『ルーシ』名称のスカンジナビア^{ノルウェー}ワリヤーク起源を強調し、イリメン湖畔ならびにドニエプル河流域における政治的統一者ないし国家形成者を北方系ゲルマン民族の一派、ノルマン人と確認したのであつた。

しかるに十八世紀後半になるや、この見解は一連のロシア人学者―ことにクロシアのダ・ヴィンチクといわれる有名なM・V・ロ

モノソフやV・M・トレデヤークコフスキーから激しい駁撃を受けた。これがすなわち『反ノルマン説』である。しかし一方、V・ペトレウスやツンマンらのスウェーデン学者や著名はロシアの歴史家N・M・カラムジン、チエツコのスラブ学者P・J・シャファリクらはいずれもノルマン説を固執して一歩も退かなかつた。そして真に学問的な研究調査が行なわれるようになったのはようやく十九世紀中頃のことであり、E・クーニクが『ルーシ』なる語をスウェーデンの Roslagen（ウップランド州の海岸地方）という地名に由来すると説明したのは一八四四年であつたが、それ以来、この問題に関する各国学界の意見の比重は一般にノルマン説に傾くかみえた。

ところが十九世紀後半期も末、論争は再燃し、D・I・イロワイスキー、S・A・ゲデオノフ、I・P・フィレヴィツチ、M・フルシエフスキーおよびP・V・ゴリュボフスキーら、錚々たる学者が反ノルマン説を支持し、『ルーシ』名称の非スカンジナビア起源スラブ説、フィン説、ハザール説、ゴート説等を強調した。かれらの一致した観点は、『ルーシ』名称はロシア国家の起源とされる九世

紀中葉以前からすでにロシア本土に存在したか、もしくは南方起源であるということであった。こうしてようやく反ノルマン説とくにスラブ起源説は積極的にその主張を推進してきたが、その時期がちょうど帝政ロシアの国力強大化と並行し、かつその支持者のほとんど全部がロシア人であることなどは見すごすことができない。

しかしノルマン説支持のグループも決してひるんだのではない。有名なデンマークの学者V・トムセンを先頭とし、ロシア歴史学界の一連の碩学^びたとえば、M・P・パゴージン、S・M・ソロウィエフ、V・O・クリュチーフスキー、M・N・バクロフスキーら、および多くのスラブ言語学者^び—F・ミクローシチ、I・I・スリョズネフスキー、V・ヤギチ、A・A・シャフマトフらが続々とノルマン説の有力な支持者として躍^はを接するにいたってはこの問題をめぐるノルマン説と反ノルマン説との論争は、ロシア、ドイツ、スウェーデン、ポーランド、フィンランド、デンマークなどの学者たちの間で大きな議論をまきおこした。こうした状況の中に今世紀にもちこまれたこの問題は、単にロシア年代記

の記述だけに依らず、中世ローマ帝国（ビザンティオン）やオリェント、ことにアラビア語の古文獻の分析吟味、さらには北露・南露各地の考古学的発掘調査の成果を考慮するという、文献と遺物との両面からする徹底的な研究へと焦点が向けられていったのである。

3

さて、歴史が国家主義・民族主義・愛国主義の根底をなすことはどの国にあっても同じである。ことに、『歴史学は共産主義実現のための最も有力な手段であらねばならない』（一九三四年の『ソ連邦史教科書概要に對する覚書』中のスターリンの言葉）という命題に導かれたソビエトの歴史学^び—すなわち史的唯物論に根ざし、共産主義イデオロギーに對するプロパガンダの第一の媒体とみなされたソ連の歴史学界において、ほぼ『ソビエト愛国主義昂揚期』以来、このロシア国家起源の問題に関する見解は、議論の余地なきドグマとしてのマルクス・レーニン主義の旗じるしのもとに国家権力によって統一され、それまでいくらか存在したノルマン説主張のロシア人学者も、もはやまったく姿を消し生存を許さ

れなくなつてしまつた。その事實は、なまなましい数多くの例にてらしてわれわれの記憶に新たなところである。『歴史学に對するソ連共産党ならびに政府の関心と指導のもとにマルクス・レーニン主義の基盤に立つたソビエト歴史学は決して時代おくれの学として停滞することは許されない。ソ連歴史学者・考古学者の結論は常にたえず新しい事實と正しい判断によつて党と政府の要求にこたえなければならぬ』し、『党とレーニン主義への確固たる忠節のうちにあつてこそソ連歴史学の今後の創造的な成果の保証がある』と強調したソビエトにおいて、ロシア国家の起源問題の検討はますます活発となり、政治的色彩を強く帯びるようになったのである。

『国家組織の片鱗すらもたず、最もはなはだしい野蛮な状態にあつたスラブ諸族を征服し国家的統一をなしたのはわれわれドイツ人の祖先である』というドイツ人学者に創唱されたノルマン説は、かれらロシア人にとつてはたしかに屈辱的であつたろう。だからこそ民族の名譽と誇りに関する重大な問題として純粹に歴史学上の論戦だけにとどまらず、政治的にも汎^{はん}ゲルマン主義に對して汎スラヴ主義

をかかげ、ドイツ人とは深い憎悪に満ちた宿怨の間柄にあったロシア人が、多分に政治的考慮に立脚し、ドイツ人のロシア人に対する歴史的優越感、民族的蔑視感に一矢をむくい、同時にドイツ人に対する劣等感をぬぐい去りロシア人の民族意識の昂揚を計ろうとして、ノルマン説支持者との間に血みどろの論議を重ねてきたのはあり得べき姿といつてよい。

『古代ロシア国家の起源』問題は、詮ずれば『ルーシ』名称の起源問題である。『ルーシ』とはなにか。部族の名称か、部族同盟の名称か、またそれはなにに由来するのか？ 結局焦点はここにしばられる。今日のソ連学界は、ポーランドやチェコなど衛星国の学者の支持をも受けて『ルーシ』という名称そのものは決してノルマン人により北方からもたらされたものでなく明らかに南方起源であること、また古代ロシア国家は生産力と生産関係、つまり社会経済的諸関係の内的発展の結果として成立したもので、そこには外来のゲルマン人^{ノルマン}の歴史的意義を考慮する余地はまったく認められない、と帰結している。

4

こうして『ルーシ』名称のスラブ起源を主張するソ連学者はいずれもノルマン説に対し「陳腐な」、「非科学的・非歴史的」、「珍妙な」といった修飾語を冠して詰り、あるいは「唯物史観の立場からすでに明確な解答が与えられている今日、これについてさらにまたなにをいうところがあるう」といった表現で駁撃を加えている。一九六四年五月発刊されたV・P・シュシャリンの労作「『古代ルーシ』についての現代ブルジョア史学」は、その第四章で「現代のノルマン説者」と題して一連のいわゆるブルジョア学者^{ノルマン}ノルマン説支持者を激しく攻撃しているし、一九六五年六月、I・P・シヤスコリスキーによって上梓された『現代ブルジョア学界におけるノルマン説』は、現在ソ連学界の指導的見解をその研究史と共に開陳し、『既に久しい以前、学問的に論証済みのノルマン説的誤謬を復活したもの』として、エール大学のG・ウェルナツキー教授（ロシアからの亡命学者で米国ロシア史学界の重鎮）の諸労作や英国東欧史学界^{ド人}の碩学^{ド人}H・パシキエヴィッチ教授（ポーランド人亡命学者）の著書を槍玉にあげている。実証的研究と明徹な方法論的省察にして始

めて歴史学研究の正常な発展が期されることは疑いがない。西欧中心主義のヨーロッパ史学の偏見の弊害はいうまでもないが、しかし『純学問的公正さの仮面を覆いつつも内にはゲルマン民族の最優秀性を誇示しようとする偽瞞に満ちた史観』とてドイツ史学に放ったソ連学界の痛烈な批判の言葉は、世界史的観点からするとき、ソ連学者自身にも向けられる批判の言葉ではなからうか。東欧古代史上の諸問題が混沌としているにもかかわらず、貧弱かつ不完全な文献史料の分析考証とおよびたらしい考古学材料の型式学的・編年学的研究、その他あらゆる資料を駆使して体系的なロシア・東欧古代史の樹立をめざして真摯な研究をつづけるソ連学者に対しては少しも敬意を失なうものでない。しかしわれわれは世界史における東欧史の軽視ないし看却を想うにつけてもショーヴィニズム的な『ソ連人のためのソビエト史』に意を満たすことはできない。『ブルジョアの歴史質造者、学問上の帝国主義的追従者^{ド人}どもの仮面を容赦なく剥ぎとるこそ最も重要な仕事』（B・A・ルイバコフ）と任するソ連の歴史学が、党と政府の要求に応じ、みずからボルシェヴィズムの闘争

的宣伝道具たらんと任じ、政策に不適切な部分は改竄^{えんざん}削除し、また追加を行ない、客観的な歴史事実の変更さえも公然と敢行してきたし、またしつある事実に対しては尽きぬ憾^{げん}みの感をおおえない。ここに次のような事例がある。一九三九年八月二十三日、独ソ不可侵条約が結ばれた。その翌年、ソ連歴史学界は、『ノルマン説者の見解を全く否定し去ることはできない。その論拠は無視さるべきでない。なぜなら余りにも多くの事実がノル

マン学派によって明証されているからである』との妥協的な意見を表明し、過去の論争に終止符を打つかのような態度をとった。しかるに早くも二年後の一九四二年には、再びノルマン説を『ファッショ的歴史贗造理論』と厳しくきめつけているのである。このように見解の豹変した背景に、われわれは複雑な独ソ関係―すなわち独ソの中立がわずか二年で廃棄され、両国間の緊迫した空気がついに一九四一年六月二十二日の独ソ開戦によつて

火を噴いたという事実を知っている。そしてその後のソ連歴史学界がどのような激しい態度をもつてノルマン説を攻撃したかはおよそ想像がつこう。

きわめて錯雑な姿を呈しているこの『ロシア国家起源』の問題については、いたずらに『岐路亡羊』を嘆くよりも、その徹底的な解明のために専ら客観的な事実、つまりただ史料にのみ即した撓^{たが}みなき研鑽^{けんさん}を心より祈つてやまない。

(香里中高教諭・社会)

春季憲法大学講座

小選挙区制と各国の政党

4月23日	議会制度とその将来……………	田畑 忍
4月30日	「ドゴールとフランスの多党分立」……………	野村 敬造
5月7日	自民党論……………	小野 哲
5月14日	小選挙区制をめぐる政友会と民政党……………	中瀬 寿一
5月21日	戦後の日本社会党史……………	太田 雅夫
	鳩山内閣とゲリマンダー（ハトマンダー）……………	芳野 勝
	民社党のゆくえ……………	井ヶ田良治
	佐藤内閣における小選挙区論の擡頭……………	山下 健次
	憲法改悪と小選挙区制……………	上田 勝美
	公明党と創価学会……………	市川 白弦

5月28日	保守党と革新党と反動党……………	土井多賀子
6月4日	公職選挙法と大選挙区制……………	一円 一億
6月11日	中国の人民代表大会制度とその選挙制……………	池田 誠
6月18日	ソヴェートの選挙制度……………	畑中 和夫
6月25日	西ドイツの選挙制度……………	室井 力
と き	韓国のクーデターと小選挙区制……………	黒田 了一
ところ	アメリカの大統領制と二大政党……………	松下 泰雄
	日本共産党について……………	宮内 裕
	イギリスの小選挙区制と労働党……………	黒田 了一
	スエーデンの社会党と保守党……………	熊谷 開作
	同志社大学明德館……………	

主催 憲法研究所